

あ
と
が
き

あみだくじ

子供の頃、駄菓子屋には「あみだくじ」があった。それは30センチほどの糸の先に飴や景品を結びつけ束ねており、その束ねた糸を一本引くことでその糸に付いた景品がもらえるというくじだ。何に繋がっているかわからない糸を引いて景品を得ようとする子供心をくすぐるくじだった。

景品の大きなチョコレート菓子等をねらって引くのだがいつもハズレの飴しか当たらなかった。ある日、私の通っていた駄菓子屋のあみだくじが、当たると普段の小遣いではとても買えないような豪華景品と引き換えられるタグにアップグレードしていた。それは子供の射幸心をくすぐり、私は豪華景品を何とか手に入れようと一回10円ほどの投資で何度もチャレンジするのだった。もちろん何度引いてもハズレの飴しか当たらなかった。

ある日のことだ、店のおばちゃんが目を離した隙にちょっとした出来心でズルをしてしまった。景品の方を逆に引っ張って当たりの付いた糸を確認し、それを引くことで当たりを手にする方法だ。ところがである、当たりの付いた糸をいくら逆に引っ張ってもびくともしないのだ。そもそもくじの束には当たりくじなど入っていなかった。

私はそのような仕掛けに憤りを感じるより、世の中そういうものだと納得し、飴をなめつつ軽く舌打ちするようなひねくれた少年だった。豪華な景品に釣られて、結局ハズレくじを引き続けるという経験をそれまでに何度も繰り返していたからだ。

そういうひねくれた少年であったためか、最近の医療情勢にも冷ややかな目で見えてしまうひねくれたオッサンになってしまった。感染症対策や医療DX化に誘導する各種報酬体系は、いかにも素晴らしい施策に見えるのだが、実際には算定要件というハードルを高くしている。さらに期間限定の経過措置で取り込んで、期間が終われば逃げ場を無くすような制度設計が多くなっている。当たりくじがあると思って引いていたらそもそも当たりはなかったという経験を積んでしまった自分には見えてしまうのだ。以前から診療報酬には「ハシゴ外し」という手法が多用されてきたが、今回の改定は根底に、今までとは異質の飴と鞭という構図が感じられてならない。でもあの時の少年のように心の中で舌打ちしか出来ない今日この頃である。

(副編集委員長 吉賀 攝)

あ
と
が
き

宮崎県（県の福祉保健部感染症対策課）が「キャッチアップ接種バージョン残り期限
わずか！HPVワクチンを接種しよう！」と2023'11月28日にYouTube動画をアップしました。

宮崎県は子宮頸がん罹患率が日本ワースト1位という事で、キャッチアップ世代に向けて
アピールしていました。

キャッチアップの接種の対象はH9年度生まれ～H18年度生まれ（1997年～2007年）の
女性、R5年4月からはH18年度生まれ、またH19年度生まれの方も通常の接種対象の年齢
（小6～高2）を超えてもR7年3月末までの接種ができます。

子宮頸がんは、HPVワクチン接種と検診によって予防できるがんですが、日本では
HPVワクチン・検診ともに十分に実施されておらず、罹患率、死亡率ともに増加していて
年間約1万1000例の女性ががんと診断され約3000人が死亡しています。（先進国で
もっとも高い罹患率、死亡率です）

背景としては、2013年～2021年の政府による積極的勧奨の控えがあり本格的に再開
されたのが2022年からであることにあります。

2022年よりHPVワクチンの接種勧奨が再開されましたが、接種率は十分に回復して
いません。

定期接種（小6～高2）も、キャッチアップ接種率も低迷しています。

欧米諸国ではHPVワクチン開発後7～8年で高い感染予防効果が確認され男子に接種
（オーストリア）もすすめられています。

産婦人科医会も、政府による積極的勧奨が控られていた期間も「救える命を救う会」
などを通し、HPVワクチン接種をすすめる活動を行い、アピールもしてきました。

私自身も、HPVワクチンが開発され、「がんが予防できる！」と喜び、性教育の場でも、
臨床の場でも、相談を受ければ「もちろん、推奨します。お友達にもすすめてね！」
とアピールしてきました。

せっかく再開されても、がん検診やワクチン接種率は中々あがりません。

行政もただ個人に通知を出すだけでなく本格的な接種率アップの施策をと考えます。

協働していきたいと思います。

（編集委員長 貞永 明美）